

---

「小さな拠点」シンポジウム(2014.2.12)

# 「小さな拠点」が拓く 農山村の未来

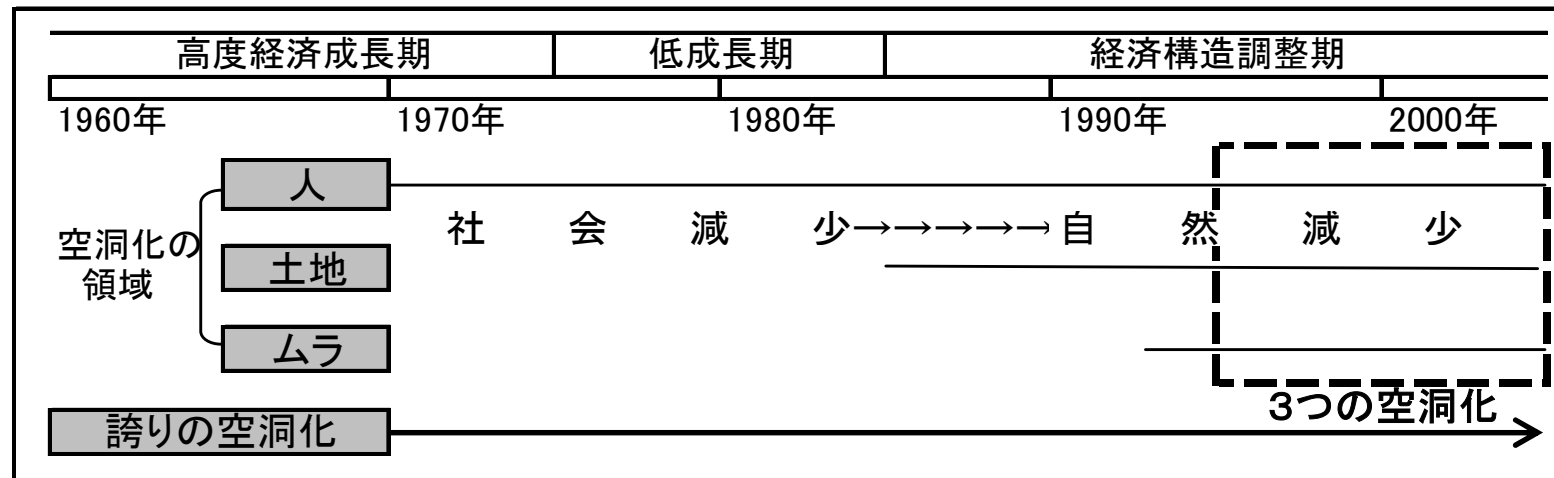
小田切 徳美  
(明治大学)

# I. いま、なぜ「小さな拠点」か？

## ■空洞化する農山村＝3つの空洞化

- 人の空洞化 → 「過疎」
  - 土地(利用)の空洞化 → 「中山間地域」
  - ムラの空洞化 → 「限界集落」
- ⇒ 「地方消滅」？

図 中山間地域における空洞化の進展(模式図)



# I. いま、なぜ「小さな拠点」か？

- 小さな「消滅可能性」→強靱な農山村集落：
  - ・その根源は人々の地域に対する愛着

表 過疎地域集落の高齢者率別に消滅可能性  
(2010年調査、構成比)

(単位: %、集落)

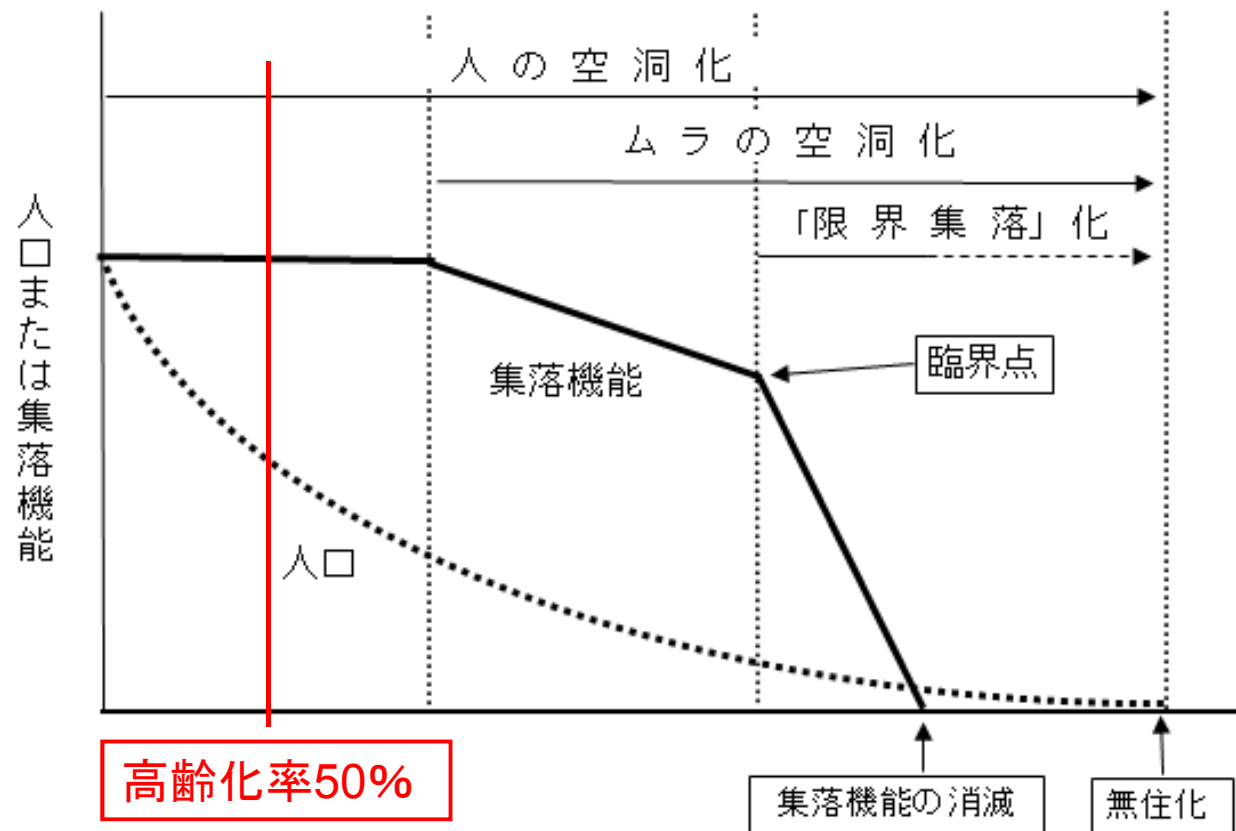
高齢者率での 集落区分	消滅の可能性あり			消滅の可能 性はない	無回答	合計 (実数)
	小計	10年以内	いずれ			
25%未満	2.4	0.5	1.9	85.2	12.4	100 (8,353)
25-50%	1.5	0.1	1.4	86.4	12.2	100 (44,912)
50-75%	12.7	1.4	11.4	74.0	13.3	100 (8,350)
75-100%	37.0	6.9	30.0	54.7	8.3	100 (1,166)
100%	59.0	28.3	30.6	36.0	5.0	100 (575)
(再掲)50%以上	18.2	3.5	14.6	69.6	12.2	100 (10,091)
合計	4.3	0.7	3.6	83.4	12.3	100 (64,954)

注: 1) 総務省過疎対策室『過疎地域等における集落の状況に関する現況把握調査』  
(2011年)より作成。

- 脆弱？ 強靱？ —どちらが現実か？

# I. いま、なぜ「小さな拠点」か？

- 農山村の性格：「強くて、弱い」（矛盾的統合体）  
⇒ その「つばぜりあい」が現在の局面



# I. いま、なぜ「小さな拠点」か？

■「小さな拠点」の意味：「強くて、弱い」農山村集落  
⇒強さを伸ばし、弱さを補強する仕組み

■その内実：拠点とネットワーク

＜強さを伸ばす＞ →攻めの側面

拠点をベースとする活動

＜弱さを補強する＞ →守りの側面

集落間ネットワーク（ふるさと集落生活圏）

■「小さな」とは？ →農山村メリットの最大活用

「小さい」の三段活用

＜小さくては＞ → ＜小さくとも＞ → ＜小さいからこそ＞

（過去形）

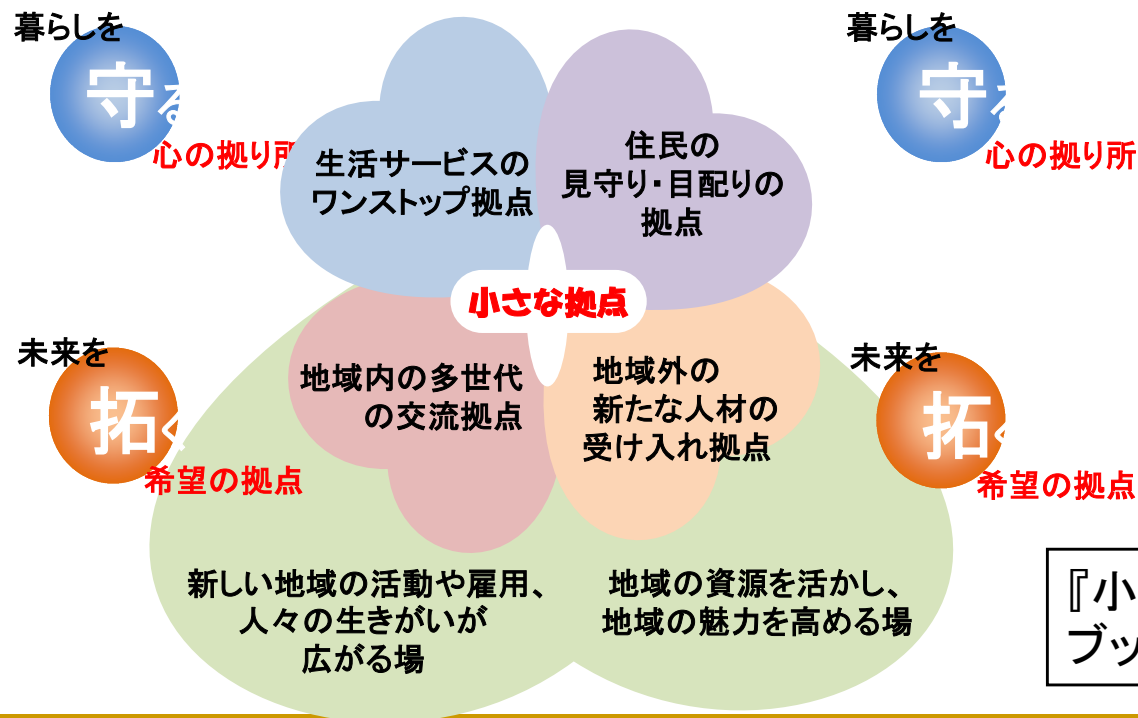
（現在形）

（（近）未来形）

# I. いま、なぜ「小さな拠点」か？

## ■ 留意点

- ① 攻めと守りの**セット化**（常にセットで考える）
- ② 従来の「**地域づくり**」との**連続性**（突飛な「切り札」ではない）



# I. いま、なぜ「小さな拠点」か？

## ■その原点＝宮口侗迪氏「低密度居住地域構想」

「『山村とは、非常に少ない数の人間が広大な空間を面倒みている地域社会である』という発想を出発点に置き、少ない数の人間が山村空間をどのように使えば、そこに次の世代にも支持される暮らしが生まれ出し得るのかを、追求するしかない。これは、多数の論理の上に成り立っている都市社会とは別の仕組みを持つ、いわば先進的な少数社会を、あらゆる機動力を駆使してつくり上げることに他ならない。」  
(宮口『地域を活かす』、1998年)

## Ⅱ. 「地域づくり」とは？－小さな拠点のベース

### ■ 「地域づくり」とは？

- ・ 「時代にふさわしい新しい価値を、地域それぞれの特性のなかで見出し、地域に上乘せする」（宮口侗迪氏）
  - ・ その意味
    - ①内発性
    - ②総合性・多様性
    - ③革新性
- ⇒既に各地の実践の積み重ねが蓄積

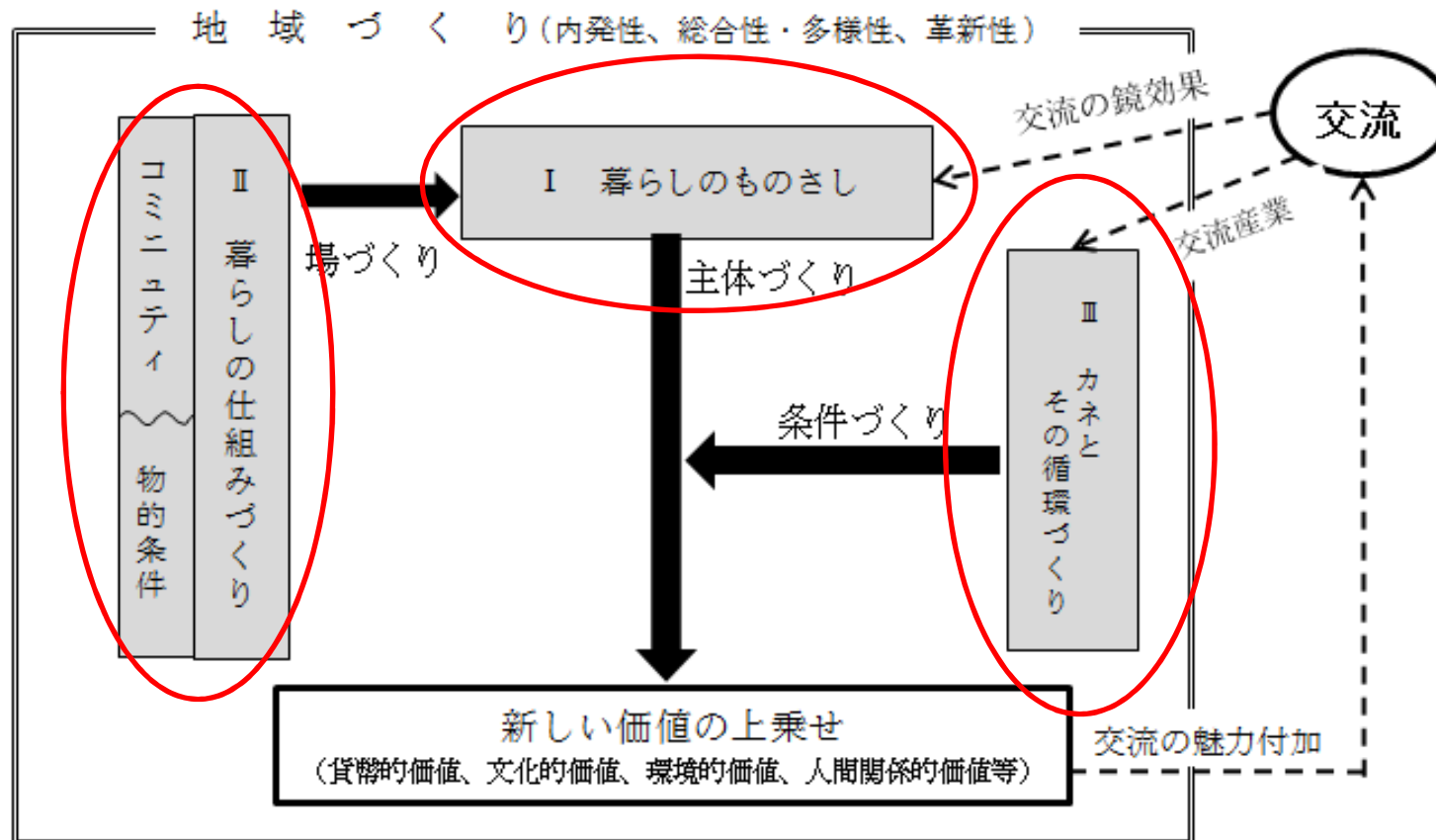


## Ⅱ. 「地域づくり」とは？ー小さな拠点のベース

### ■ 地域づくりのフレームワーク = 「小さな拠点」

※主体・場・持続条件の3要素の組み立て

図 地域づくりのフレームワーク



## Ⅱ. 「地域づくり」とは？ー小さな拠点のベース

### ■都市農村交流と地域づくりー二つのルートー

①**交流の鏡効果**→「暮らしのもののさしづくり」

- ・都市住民が「鏡」＝農村の「宝」を写し出す  
→農村サイド（ホスト）の再評価

②**交流産業**→「カネとその循環づくり」

- ・ホストとゲストの「学び合い」が付加価値  
→高いリピーター率＝成長産業の可能性

⇒地域づくりの「**交流循環**」

- ・上記を通じて、「新しい価値」の更なる上乗せ

**※都市農村交流は戦略的活動**

## Ⅱ. 「地域づくり」とは？－小さな拠点のベース

### ■「カネと循環づくり」－2つのポイント

#### ①地域資源**保全型**経済

- ・「地域資源活用」から「地域資源**保全**」へ  
＝資源保全＋資源磨き＋資源活用
- ・資源保全の「物語」に都市住民の「共感」が集中  
物語マーケティング＝「『物語』があって、はじめて商品は動く」(流通関係者)

※地域資源保全→物語→共感の循環を作る

## Ⅱ. 「地域づくり」とは？—小さな拠点のベース

### ② 小さな経済—その経済規模—

- ・意外と小さな追加所得要望（月収3～5万円）  
→年間36万～60万円の所得形成機会  
⇒「小さな経済」の構築が必要

※「小さな経済」の累積の上の、若者定住を可能とする「中程度の産業」が成立する

＝もう一つの地域開発方式

＜従来＞大きな経済→波及効果→中程度の経済

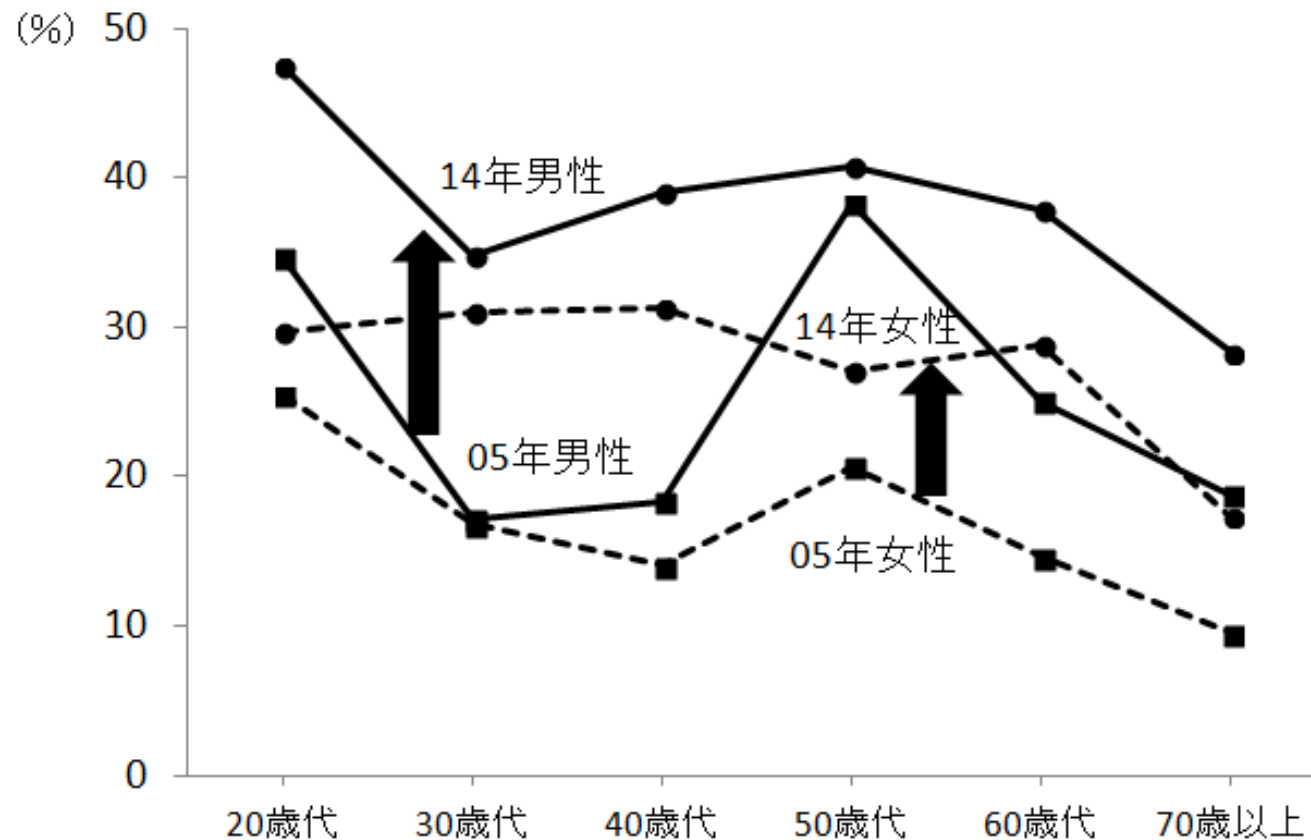
＜現在＞小さな経済→積上効果→中程度の経済

## Ⅲ. 田園回帰と「小さな拠点」

### ■ 国民の「田園回帰」志向

#### ・ 移住希望の著しい上昇（特に若者、女性）

図● 農山漁村に対する定住の願望を持つ人の割合  
（内閣府世論調査、2005年と2014年）



## Ⅲ. 田園回帰と「小さな拠点」

### ■ 移住者の量的把握「毎日・明治大学合同調査」

＜2013年度＞全国＝8169人（1月3日毎日新聞）

### ■ 「移住者などごくわずかなもの」

という批判もあるが・・・

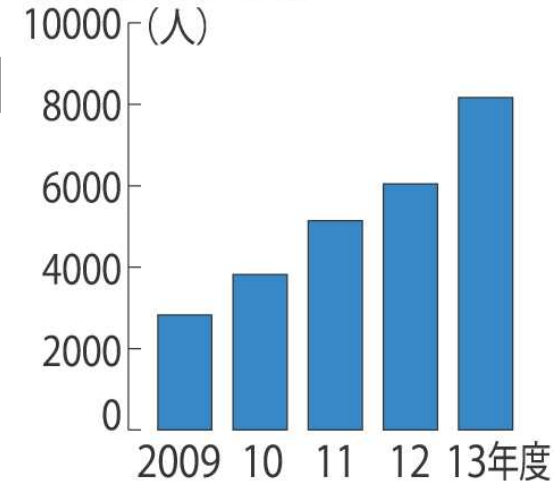
#### 1. 移住者の質的な意味

- ・「選択住民」の発信力

- ・IターンのUターン刺激効果（「愛(I)がYou(U)を刺激する」）

#### 2. 量的な意味→「藤山推計」

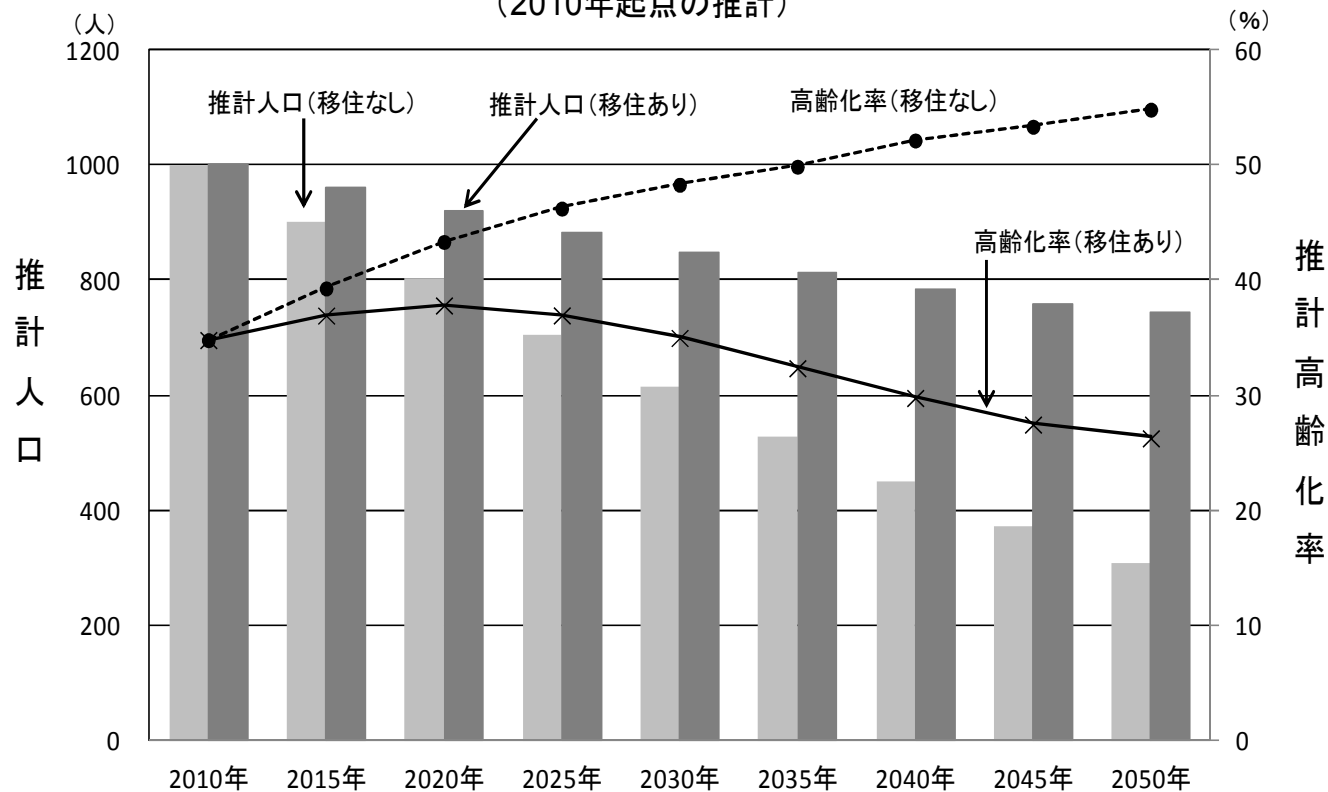
移住者数の推移



# Ⅲ. 田園回帰と「小さな拠点」

## ■ 藤山推計＝実数で考える

図終ー1 山間地域のモデル地区(人口1000人)の将来人口と高齢率  
(2010年起点の推計)



- 注: 1) 資料＝国土交通省「国土のグランドデザイン2050(参考資料)」(2014年)より加工引用。  
2) 「移住なし」は単純なコーホート分析による推計。「移住あり」は、0歳代前半の子連れ家族(子どもは0-4歳代)2組と20歳代前半の夫婦2組の合計4組・10名の移住が毎年あると仮定したうえで、コーホート分析をしたもの。  
3) 推計方法は藤山浩「中山間地域の新たなかたち」(小田切・藤山編著『地域再生のフロンティア』、農文協、2013年)による。

## Ⅲ. 田園回帰と「小さな拠点」

### ■ 田園回帰の特徴（実態調査より）

- ① 20～30歳代が多い－「団塊の世代」は少ない
- ② 女性割合が上昇；夫婦移住、単身女性、「シングルマザー」－従来は圧倒的に単身男性
- ③ 職業は「半農半X」、「ナリワイ」（多業化）－従来は専門的農業就業（移住夫婦の標準＝「年間60万円の仕事を5つ集めて暮らす」－農業はその1部門として重要→「兼業スタート型」新規就農対策
- ④ 「地域おこし協力隊」などの制度を積極的利用
- ⑤ 「Iターン」が「Uターン」を刺激（「一世代飛び越し型『Uターン』」＝「孫ターン」）



## Ⅲ. 田園回帰と「小さな拠点」

### ■ 田園回帰の「受け皿」としての「小さな拠点」

＜事例＞高知県土佐町 石原地区 「いしはらの里」

- ・石原地区(旧小学校区)＝4集落で構成
- ・2011年11月より「小さな拠点」づくり(集落活動センター)に向け検討を開始  
20回以上のワークショップを重ね「いしはらの里協議会」を設立
- ・2012年7月に「集落活動センターいしはらの里」を開設
- ・2013年2月にガソリンスタンドをオープン
- ・2013年7月、住民250人が1口1000円を出資して合同会社を設立
- ・2013年11月より、GS敷地内に野菜や総菜などを売る小売店を開設
- ・合同会社では、大阪府からの移住者など、若者2名を新たに雇用



## Ⅲ. 田園回帰と「小さな拠点」

### ■ <仕事づくりの事例> 新潟県上越市 安塚区 「安塚コミュニティプラザ」

- ・安塚区(旧安塚町)は28集落で構成、うち11集落では高齢化率が50%超
- ・2005年の合併を前に、これまでの旧町でのまちづくりの取組を引き継ぐため、8割の世帯が参加した『全住民参加型』の「NPO法人雪のふるさと安塚」を設立
- ・旧町民会館を活用し、地域住民の活動・交流拠点「安塚コミュニティプラザ」を設置  
NPOが管理運営委託を受け、事務所を置いて多様な地域づくり活動を展開
- ・NPOは地区住民の**雇用の場として、常勤3名、臨時2名、パート28名の職員を雇用**
- ・高齢者等の福祉サービスを必要とする会員を対象に、有償ボランティアとして登録した住民が、福祉有償運送、屋根の雪下ろし、草刈り等の支援活動を実施
- ・市から年間20件近くの事業を受託、これに自主事業も含め、年間約4,500万円の事業収入があり、概ね黒字運営を継続



## Ⅲ. 田園回帰と「小さな拠点」

### ■ <仕事づくりの事例> 高知県津野町 貝ノ川床鍋地区 「森の巣箱」

- ・集落消滅の危機感を抱いた若者数名が中心となり、集落再生策を検討
- ・2001年3月に、廃校活用を軸とする集落活性化プランを策定
- ・廃校舎を改修し、平成15年4月に、コンビニ・居酒屋に加え、宿泊施設や浴場、ホール等の機能を備えた「小さな拠点」=森の巣箱が誕生
- ・運営経費は集落住民全員(130人)が出資、役員で構成する「森の巣箱運営委員会」が運営
- ・**コンビニ運営や食事の提供のために集落住民を雇用**
- ・隣接する集会所にししとうのパック詰めを行う作業所を開設、JAから選荷作業を受託し、集落の高齢者の雇用の場を創出
- ・コンビニ等の売上は減少傾向にあるも、宿泊事業は好調で高い収益を維持

集落コンビニ	常時2名(1名月給、1名パート)
食事の提供	集落の女性でローテーション(パート)
施設内清掃	パート
宿泊・居酒屋	集落の男性(無報酬)
屋外清掃	老人クラブ(無報酬)
樹木整備	役員(無報酬)



## IV. 「小さな拠点」の課題

### ■ミクロ的課題

- ①ハード(空間整備)とソフト(しくみ)の調和
- ②ソフト整備
  - ・集落圏を「束ねる人材」が重要
    - 「利害フリー」の外部人材の活躍場面
  - ・攻めの取り組みに必要な「専門家アドバイス」
- ③集落間をつなぐ「生活交通」の確保・安定化

### <検討課題>

- ・立ち上がり期間の「システム支援」(人件費を含む)  
(システム支援←→プロジェクト支援)

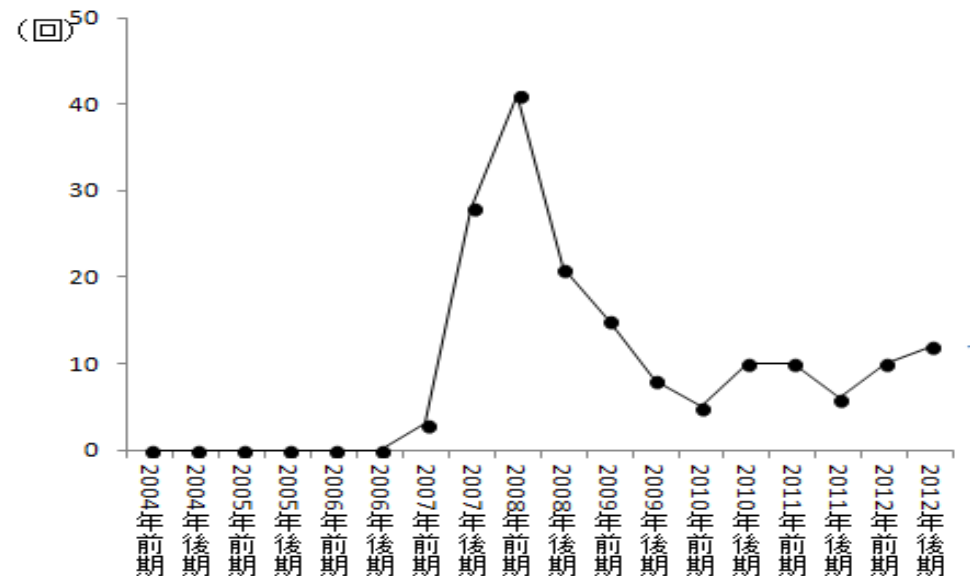
## IV. 「小さな拠点」の課題

### ■マクロ的課題

「地方創生」を前進させる要素

＝国民の関心(前回の「地域再生」は政治的ブーム)

図 新聞紙上(日本経済新聞)における「限界集落」の登場頻度



注:日本経済新聞(朝夕刊および地方経済面)の「日経テレコン」による本文・文字検索結果より作成。

## IV. 「小さな拠点」の課題

### ■都市住民と共有すべき農山村の新しい役割

(全国町村会提言「都市・農村共生社会の創造」2014年より)

- ① **新たなライフスタイル、ビジネスモデルの提案の場(小さな拠点の役割)**
- ② **少子化に抗する砦**
- ③ **再生可能エネルギーの蓄積**  
⇒国内戦略地域(国際的戦略物資である食料、水、エネルギー、CO2吸収源の供給地)
- ④ **災害時のバックアップ**

※今回の「地方創生」をブームとせず、  
「小さな拠点」から「都市・農村共生社会」の構築へ